

機関番号： 37111
 研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2008～2010
 課題番号： 20520401
 研究課題名 (和文) メディアと都市言語－16世紀ニュルンベルクのパンフレット・ビラに関する文体研究
 研究課題名 (英文) Media and Urban Language — Stylistic Studies on Pamphlets and Single Leaf Woodcuts of 16th Century Nuremberg
 研究代表者
 森澤 万里子 (MORISAWA MARIKO)
 福岡大学・人文学部・教授
 研究者番号： 70279248

研究成果の概要 (和文) : コミュニケーション上の大革命をもたらしたとされる活版印刷がドイツ文章語の成立に及ぼした影響を探るため, 16 世紀におけるニュルンベルクの都市言語を文体論の観点から分析した。その際, 活版印刷が一般市民の私的テキストの文体に与えた直接的な影響は確認できなかったが, 「新聞」が存在しない時代に, 時事的な情報を幅広い層の人々に伝える役割を果たしたパンフレットとビラの文体が, 当時の人々の文体意識の形成に寄与した可能性が見出された。

研究成果の概要 (英文) : The topic is an investigation of the impact the introduction of letterpress printing had on the development and formation of a standard literary/written German language which is said to have brought about a revolution in communication in Central Europe. To that end, I analyzed from a stylistic point of view, the urban language of 16th century Nuremberg. I was not able to confirm a direct impact of the introduction of letterpress printing on the personal texts of the local citizens. However, there appears to exist a possibility that the style of pamphlets and single leaf woodcuts serving at the time as predecessors to the newspapers of later times, might have contributed to the raising of stylistic awareness of the writing-style of people.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 言語学

キーワード: 社会言語学・独語史・文体論・関係詞

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語史研究において, 活版印刷という新メディアがドイツ文章語の成立に及ぼし

た影響は概ね肯定されている (藤井明彦: 初期新高ドイツ語期の印刷術と印刷業者—A. Schirokauer の「遺産」をめぐって— [『ド

イツ文学』第84号, 1990, 22-38頁] 23頁参照)が, メディア論の分野においてもこの言語媒体の変化と文章語成立の関連性は取り上げられている。その一例として, マクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』(マーシャル・マクルーハン(森常治訳): グーテンベルクの銀河系 活字人間の形成, みすず書房 1986, 351頁参照)を挙げることができるが, マクルーハンの考察に触発されて研究を行ない, 『印刷革命』を著したアイゼンステインはさらに, 活版印刷により知識の普及と蓄積, 編集が可能になり, そのことが西ヨーロッパ文化に不可逆的な変化をもたらしたとしている(エリザベス・アイゼンステイン(別宮貞徳監訳): 印刷革命 みすず書房 1987, 特に6及び296頁参照)。ただし, アイゼンステインも示唆しているように, 活版印刷がもたらしたコミュニケーションの変容の結果を分析する研究はまだその途上にあり(同上, 3頁参照), また, ドイツ語史の分野でも文章語の成立過程における活版印刷の影響についてはまだ解明の余地が大いに残っていると言える。その一例が諸方言の統一化傾向と平行して, 一印刷都市内で言語的均一化がどのように進化したかという点である(藤井(1990), 32及び34頁参照)。

このような課題に取り組むべく本研究が着目したのが, 16世紀におけるニュルンベルクの都市言語である。15世紀中葉にマインツで発明された活版印刷術が比較的早い時期(1470年頃)に伝播した同市は, 15世紀のうちに既に, 印刷者アントン・コーベルガーの名とともに主要な印刷都市の一つとして知られていた。

調査資料の中心においたのは, この都市で出版されたパンフレットとビラである。周知の通り, 初期の活版印刷が世に送り出したのは, 主としてラテン語で書かれた書籍であり, その数をドイツ語書籍が上回るのは17世紀に入ってからのことである。しかしながら, 16世紀においてパンフレットとビラはその差を縮めることに大きく貢献した。それは16世紀前半に起こった宗教改革が人々の多大な関心を惹き, これに関する文書が数多く印刷されたことと関連している。このように資料が比較的豊富であったことから, パンフレットやビラに関する社会言語学的・文体論的研究はこれまでその主たる関心を16世紀前半に出版された宗教関係の文書におくこととなった。それのみならず, 書誌学の文献も, 再版される割合が高かった宗教的パンフレットやビラの文体に着目し, そこには説教にならった口語的要素も少なからず含まれて

いることから, 朗読という形態を通して, 文字を読むことのできない社会層の人々ですらそこで使われるドイツ語にふれた可能性がある」と述べている。

ただし, シュヴィタラが指摘するように, 「パンフレット(及びビラ)」それ自体は一つのテキスト種ではなく, 出版物の一形態を指す概念である(Vgl. Johannes Schwitalla: Flugschrift. Niemeyer 1999, S. 7)。この形態を通して宗教的テキスト以外のもの, 例えば, 政治状況や戦況等を伝える時事的テキストも一般市民の手元に届けられたことを考えるならば, これらのテキストも考察の対象に含め, 一都市における言語状況とその変化を把握することにも大きな意義があると言えるだろう。

研究代表者は既に16世紀のニュルンベルクに関する都市言語研究を進めており, 文体手段を手がかりに当時の威信言語である官庁語のテキストと一般市民男性・女性の私的テキストの比較を行なっている。その際得られた結果は, 16世紀前半よりも後半において, 殊に女性の私的テキストの文体が当時の威信言語であった官庁語のそれに近くなるというものであった(Mariko Morisawa: Syntaktische Erscheinungen als Spiegel der Gesellschaft im 16. Jahrhundert. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd. 3/Heft 1. iudicium 2004, S. 183-195)。以上は, 言うなれば手書き文書に関する調査結果であるが, 調査資料に印刷物を加え, しかもテキスト種ごとの文体の相違と一般市民の言語慣習の関係を探るならば, それは一都市における言語状況をより精緻に考察する素地を与えるものと考えられる。

また, 特に書記法に関しては, 16世紀初頭において既にドイツ語史上で果たす主導的な役割を印刷業界が官庁から引き継ぐことが指摘されている(Vgl. Wilhelm Schmidt: Geschichte der deutschen Sprache. 6. Aufl. Hirzel 1993, S. 101f.)が, このことを顧慮するならば, 一般市民の私的テキストに見られる文体への影響という点で, 官庁語と印刷語を比較することも有意な研究課題の一つと見なすことができる。

2. 研究の目的

このような背景をふまえ, 本研究では特に16世紀後半にニュルンベルクで出版されたパンフレット及びビラに関し, 次の2点を明らかにすることを試みた:

- (1) 特定の種類のテキストに典型的な文

体はあるか、また、それが一般市民の私的テキストの文体に影響を及ぼしたと考えられる可能性はあるか

- (2) 文体に関し、威信言語である官庁語よりも、一般市民の私的テキストにより近いと見なしうるテキスト種はあるか。

この2点を解明することにより、16世紀におけるニュルンベルク市民の言語慣習に活版印刷が及ぼした影響に関する仮説を立てることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

パンフレット、ビラを含む16世紀の印刷物は一般に貴重書もしくは稀覯書として扱われるため、インターネット上で公開されているものを除けば、図書館もしくは文書館で閲覧の上、自らデジタルカメラで撮影し、画像ファイルとしてパソコンに取り込まなくてはならない。ただし、撮影が許可されないことも多く、その場合は当該施設にCD-ROM化及びその送付を依頼することとなる。そのため、「外国旅費」を用いて二週間前後の出張を計5回行ない、バイエルン国立図書館（ミュンヘン）やチューリヒ中央図書館（スイス）をはじめとするドイツ圏各地に点在する研究施設を訪ねた。

また、「外国旅費」によりドイツに赴いた際には、以前より接触のある、ハレ-ヴィッテンベルク大学のハンス-ヨアヒム・ゾルムス教授を訪ね、資料収集のみならず、研究の進め方、研究上の問題点の解決に関する助言をいただいた。

収集したパンフレットやビラをはじめとする資料からは、文体に関する言語的要素を抜き出してコーパス（言語資料）を作成し、データ分析を行なった。

ゾルムス教授の助言と学会発表時に得られた意見、さらに二次文献の記述をふまえて、「研究目的」欄で挙げた2点についてどのような回答を示すことができるかという点を検討し、活版印刷の都市言語への影響に関する仮説をたてた。

4. 研究成果

本研究が着目した文体的要素は関係詞である。現代ドイツ語で一般的に使用される関係詞は *der* 一以下、煩雑を避けるために男性主格の語形のみを掲げるが、データ分析にあたってはその変化形も顧慮されている一であるが、16世紀においては主として *so* 及び *welcher* がこの関係詞と競合する。先行研究によると、これら三つの関係詞はそれぞれ異なる文体的特徴を持つ。即ち、*der* はいわば無標であるが、*so* は官庁語的、*welcher* は教養語的な文体手段

と見なすことが可能である。本研究ではこれらの関係詞が現れる比率をテキストグループごとに分析し、それらを比較することによって上記の研究課題を解明することを目指した。なお、データ分析の対象は、純粹格[相当]の関係詞に限定されており、関係副詞や定関係代名詞が前置詞を伴う事例は顧慮されていない。

本研究で新たに挙げたテキストグループは「時事テキスト」、「宗教テキスト」、「専門テキスト」の三つである。「時事テキスト」は政治・社会情勢、天の超常現象をはじめとする時事情報を伝えるもので、新聞が存在しなかった時代にあってこれと同等の役割を果たしたと考えられるものである。なお、「宗教的テキスト」に関しても、当初パンフレット及びビラの形で出版されたものに限定し、それを資料とする予定であったが、その収集が目論み通りに進まなかったことから、殊に16世紀後半に関しては書籍によりこのグループを形成することとなった。分析に十分な量の資料が収集できなかった要因としては、時代及び出版地の制約もさることながら、恐らく宗教改革の進展との関係でニュルンベルクにおいても宗教的印刷物の検閲がかなり厳しく行なわれたこと、それによりその出版に困難が生じたことが考えられる。また、資料収集の過程で見出された宗教的内容のビラに関しては、その多くが韻文で書かれていたことからさしあたり調査の対象外としたことここで付言しておく。

「専門テキスト」は当初の予定になかったもので、芸術理論、商業、銃器製造に関する書籍により構成されるグループであるが、「テキスト種」ごとの文体の相違をつきとめるという点ではこのグループに関するデータも有用であると思われたことから、調査対象に含めることとした。

以下、本研究の開始以前に得られた、官庁のテキスト、一般市民男性・女性の私的テキストに関するデータとともに、各テキストグループのそれを16世紀前半と後半に分けて掲げる。「官庁」、「男性」、「女性」に関する資料の詳細は以下を参照のこと：Morisawa (2004), S. 193-195. 「宗教テキスト」については、16世紀前半は計4点のパンフレットと書籍、後半は3点の書籍、「専門テキスト」は前後半ともに各4点の書籍を資料としている。16世紀前半の「時事テキスト」のデータは、13点のパンフレット及び12点のビラ、後半のそれは11点のパンフレットと43点のビラによるものである。

表1 : 16世紀前半
(数値はパーセンテージ, 括弧内は実数)

	der	so	wel- cher	その他	計
官庁	56.03 (195)	29.60 (103)	2.59 (9)	11.78 (41)	100 (348)
男性	33.72 (87)	41.47 (107)	8.91 (23)	15.89 (41)	100 (258)
女性	92.31 (36)	0 (0)	0 (0)	7.69 (3)	100 (39)
宗教	78.80 (316)	10.72 (43)	5.24 (21)	5.24 (21)	100 (401)
専門	81.48 (154)	2.65 (5)	6.88 (13)	8.99 (17)	100 (189)
時事	67.92 (144)	20.75 (44)	8.02 (17)	3.30 (7)	100 (212)

表2 : 16世紀後半
(数値はパーセンテージ, 括弧内は実数)

	der	so	wel- cher	その他	計
官庁	36.32 (77)	28.77 (61)	18.40 (39)	16.51 (35)	100 (212)
男性	42.83 (227)	20.57 (109)	28.87 (153)	7.74 (41)	100 (530)
女性	42.06 (45)	10.28 (11)	29.91 (32)	17.76 (19)	100 (107)
宗教	52.90 (82)	18.71 (29)	21.29 (33)	7.10 (11)	100 (155)
専門	33.99 (139)	37.90 (155)	21.03 (86)	7.09 (29)	100 (409)
時事	24.48 (118)	35.68 (172)	35.27 (170)	4.56 (22)	100 (482)

まず表1において、威信言語である官庁語のテキストに三つの関係詞が現れる比率を見ると、無標の der が最も多用される関係詞であり(56.03%),それに官庁体の so (29.60%), 教養語的な welcher (2.59%) が続くことが分かる。16世紀後半においても「官庁」がこの出現順位を維持することは表2の数値から看取されるが、問題は同表において一般市民のテキストはこれとは異なる出現順位を示しているということである。即ち、「男性」、「女性」とともに der に次いで多用されるのは so ではなく、welcher となっている。

welcher は恐らく三つの関係詞の中で最も遅く伝播したことに起因し、16世紀前半(表1)の全てのテキストにおいてさほど、もしくは全く例証されていない。この関係詞を最も多用したグループ(「男性」)でも、その数値は8.91%にすぎないが、16世紀後半(表2)に入ると全てのグループでその出現率が二桁台に伸びている。「官庁」においては

welcher の出現率が官庁体である so のそれを上回ることにはなかったが、一般市民はむしろ前者を優先させて使用したことになる。

関係詞の出現順位に関し、表2において唯一一般市民と同様の結果を示しているのが「宗教」である(der 52.90%, welcher 21.29%, so 18.71%)。この点だけに目を向けるならば、「研究の目的」で掲げた解明点の一つ、「威信言語である官庁語よりも、一般市民の私的テキストにより近いと見なしうるテキスト種はあるか」という問いには、「宗教テキスト」がそれであると回答することになるであろう。ただし、顧慮すべきは、このグループにおける so と welcher の出現率の差は2.58%に留まっており、実数を見てもその差が4しかないことである。16世紀後半の「宗教テキスト」に関しては、その資料の点数が3であることは上で述べたが、そのうち1点は実のところこの世紀の前半に出版された書籍の新訂版である。ゆえに、現段階では上の問いに対する明確な回答は避け、可能であれば宗教的内容の資料を増やして、さらなる検討を行なうこととしたい。

これに対してもう一方の解明点、16世紀後半に出版された「特定の種類のテキストに典型的な文体はあるか」という点については、肯定的な答えを出すことが可能と思われる。表2において so が der の出現率を上回る「専門テキスト」にも注意が惹かれるが、しかしながら関係詞の分布に関して最も特異な様相を呈しているのは「時事テキスト」である。so と welcher がともに35%台の出現率を示しているのに対し、der のそれは24.48%であり、10%以上の開きがある。すなわち「官庁」とは異なり、無標の der よりも官庁体の so と教養語の welcher をはるかに優先させて使用しているということになるだろう。「時事テキスト」における関係詞の分布がこのような特異な様相を呈する要因は次のように推測することが可能である。

本研究で取り上げた「時事テキスト」は新聞の先駆け—新聞と見なしうるものが世に送り出されるのは17世紀に入ってからのことである—と呼ばれるもので、「情報価値」という面でその信憑性が問題となる。殊に16世紀後半に関して資料としたものの多くは、戦争に関する残酷な描写や天に現われた幻影等、にわかには信じがたいことがらをまことしやかに伝える記述を少なからず含むものであるが、このようなセンセーショナルな内容は多売を目的とするパンフレットやビラには欠かせず、それだけ一層内容の信憑性を強調する必要があった。それが so 及び welcher の多用につながったものと考えられる。即ち、時事テキストの信憑性を重みのある文体で強調しようとした結果、官庁語的、

教養語的な文体手段が他のテキスト種に増して多用されたと見ることができるのである。

以上、「時事テキスト」というテキスト種が持つ典型的な文体について言及したが、そこに現れる関係詞の分布は、一般市民の私的テキストに見られるそれとは全く異なる様相を呈していることから、前者の文体が後者の文体に直接的な影響を及ぼした可能性は確認できないと言ってよいだろう。ただし、上に掲げた推測、即ち、「時事テキスト」ではその文体に重みを持たせるため、官庁語、教養語的な文体手段が多用されたとする説が仮に正しいとするならば、これはまた、このテキストの受け手はどのような文体的特徴を把握できた、もしくはこのようなテキストに度々触れるうちにその文体的特徴を把握できるようになった、ということにもなるのではないだろうか。一般市民が、自分達の書く私的テキストの文体とは異なる文体にふれたとき、両者の相違に気づくならば、それは新たな文体意識の芽生えにも繋がるように思われる。このような推測が許されるのであれば、時事テキストの文体は一般市民が紡ぐテキストの文体に間接的ではあるが影響を及ぼしたとの仮説を立てることも可能と考えられるのである。

以上の報告は、一都市における言語状況及び言語変化に関するものであるが、16世紀における都市言語を様々なテキストグループを顧慮して分析したこと、また、これまで注目されることの少なかった16世紀後半のパンフレットとピラ、殊に時事テキストの文体を取り上げたことにより、ドイツ語史の記述に新たな知見をもたらし、そしてまた言語史と関連するメディア論や書誌学の研究にも貢献する可能性を持ちうるものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 森澤万里子, トルコ情勢を報じる16世紀のパンフレット ―テキスト作成に関与した社会的意図をめぐり―の考察―, ドイツ文学, 査読有, 140号, 2010, 60-75
- ② 森澤万里子, 16世紀後半の時事報告における関係詞の分布について ―パンフレットとピラに関する文体論的考察―, 福岡大学人文論叢, 査読無, 41巻2号, 2009, 707-732

〔学会発表〕(計2件)

- ① 森澤万里子, 16世紀後半の時事報告における関係詞の分布について ―パンフレットとピラに関する文体論的考察, 日本独文学会(ブース発表), 2008年10月12日, 岡山大学(岡山)
- ② Morisawa, Mariko, Relativsatzleitungen in der Nürnberger Stadtsprache des 16. Jahrhunderts -Eine Analyse von privaten Texten und Flugschriften-, ハレヴィッテンベルク大学ドイツ語学文学研究所コロキウム, 2008年7月3日, ハレ大学(ドイツ)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森澤 万里子 (MORISAWA MARIKO)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 70279248